

書画から石を愛でる

令和8年2月14日（土）～4月5日（日）

展示室 特別展示室

盆石趣味など、石を愛でる文人たちは昔から多くいました。また「石」を画題とした作品も少なくありません。本展では、書画に描かれた「石」を紹介します。

指定	作者	作品名	制作年	材質	形状	備考
市指	わたなべかざん 渡辺華山	こせきはくびょうず 湖石白猫図	天保9(1838)年	絹本着色	掛幅	
市指	渡辺華山	ふうちくのず 風竹之図	天保9(1838)年	絹本墨画	掛幅	
市指	渡辺華山 渡辺小華	ふくろくじゆず 福祿寿図	江戸時代後期～明治時代	紙本墨画淡彩	掛幅	3幅対
	渡辺華山 立原杏所	しょうじゆかいせきざかん 松寿介石図巻	天保4(1833)年	紙本墨画淡彩	卷子	
	たちばらきやうしよ 立原杏所	しょうりんこうしよずせんめん 松林高土図扇面	江戸時代後期	紙本着色	マクリ	
	つばき ちんざん 椿 椿山	せきふ 石譜	天保13(1842)年	紙本墨画淡彩	卷子	
	椿 椿山	やおえんねんず 八百延年図	天保14(1843)年	紙本墨画淡彩	掛幅	
	椿 椿山	しょうはくず 松柏図	嘉永5(1852)年	絹本着色	掛幅	2幅対
市指	椿 椿山	かきずびょうぶ 花卉図屏風	嘉永4(1851)年	紙本墨画淡彩	屏風	六曲一双
	おかだはんこう 岡田半江	かきさつ 花卉冊	江戸時代後期	紙本着色	画帖	
	さくらませいがい 桜間青厓	とうびじんず 唐美人図	江戸時代後期	紙本墨画淡彩	掛幅	
	やまもときんごく 山本梨谷	りゅうび かんう ちやうひ ず 劉備・関羽・張飛図	慶応元(1865)年	紙本着色	掛幅	
	ながお かよう 長尾華陽	しきかちやうずびょうぶ 四季花鳥図屏風	明治34(1901)年	紙本墨画淡彩	屏風	六曲一隻
	たかもりさいがん 高森碎巖	かいせきず 怪石図	大正2(1913)年	絹本着色	掛幅	
	のぐちゆうごく 野口幽谷	ちくせきはくびょうず 竹石白猫図	明治時代前期	絹本着色	掛幅	
	野口幽谷	さいかんせんゆう 歳寒仙友	明治12(1879)年	絹本着色	掛幅	
	野口幽谷	からくどうだんしやうしゆきちやう 和楽堂談笑珠璣帖	明治時代前期	紙本墨画淡彩	画帖	
	野口幽谷	からくどうとしよき 和楽堂図書記	明治時代前期	紙本墨画淡彩	冊子	個人蔵
	まつばやしげいづつ 松林桂月	さいかんせんしよく 歳寒仙色	大正～昭和時代	絹本着色	掛幅	
	松林桂月	じんぶつ ず 人物譜	明治35(1902)年	紙本墨画淡彩	マクリ	個人蔵

市指＝田原市指定文化財

表記のないものは当館所蔵

田原市博物館

<作者紹介>

渡辺華山 寛政5(1793)年～天保12(1841)年

渡辺定通の長男として、江戸に生まれました。はじめ平山文鏡に師事し、白川芝山、金子金陵、谷文晁らに絵を学びます。華山は写実的な描写にこだわりました。特に肖像画を得意とし、西洋の陰影法を巧みに使い、独自の画風を確立しました。また重要文化財「一掃百態図」(当館蔵)など、当時の文化や風俗を伝える資料が残っています。

椿 椿山 享和元(1801)年～嘉永7(1854)年

はじめ金子金陵に師事しました。金陵が亡くなった後、同じく金陵の門下であった渡辺華山の弟子になります。蛸社の獄で華山が逮捕された際は、その救済に奔走しました。華山没後は、華山の家族を献身的に支えました。花鳥画を得意とし、輪郭線を描かない方法で花卉図などを多く制作しました。

渡辺小華 天保6(1835)年～明治20(1887)年

渡辺華山の次男です。小華が7歳の時に、父である華山が亡くなりました。その後、椿椿山の画塾に入門し、花鳥画の技法を学びます。22歳の時、兄の立の死後、渡辺家の家督を継ぎ、30歳で田原藩の家老に就きました。明治維新後、内国勸業博覧会への出品や明治宮殿の杉戸絵などを制作しました。

岡田半江 天明2(1782)年～弘化3(1846)年

岡田米山人の長男として大坂に生まれました。幼少の時から父より絵を習います。父と同じく藤堂藩の下役として仕えました。父の没後、家業の米屋を継ぎましたが、文人画家としても活動を続け、田能村竹田や頼山陽、篠崎小竹などと交友しました。潤いのある豊かな作品が特徴です。

桜間青厓 天明6(1786)年～嘉永4(1851)年

岡崎藩主本多家に仕えた岡崎藩士です。渡辺華山・椿椿山と交友していました。青厓が描く山水画は「山水は我青厓に及ばず」と華山に言われるほど得意でした。蛸社の獄で華山が捕らえられた際に、華山の釈放に尽力した一人です。

山本栞谷 文化8(1811)年～明治6(1873)年

石見国津和野(現在の島根県津和野市)で生まれました。はじめ津和野藩家老の多胡逸斎に絵を学びまし

た。江戸へ出府後、渡辺華山の弟子になり、天保11(1840)年には椿椿山へ入門。嘉永6(1853)年、津和野藩絵師になりました。山水画や人物画を得意としました。

立原杏所 天明5(1785)年～天保11(1840)年

水戸藩の儒学者立原翠軒の子として、水戸に生まれました。19歳で家督を継ぎ、有能な藩士として徳川斉昭の信任を得ていました。絵を林十江や谷文晁に学び、花鳥画や山水画に優れる一方で、重要文化財「葡萄図」のように大胆で奔放な筆致の作品も描きました。

長尾華陽 文政7(1824)年頃～大正2(1913)年

浜名郡篠原村(現在の浜松市)に生まれました。漢学を大橋訥庵に、書を巻菱湖に、画を椿椿山に学びました。その後、呉服商奈良屋作兵衛に婿入りして長尾家を継ぎ、明治30(1897)年頃から湊町神明社の神職を務めました。彩色に優れ、花鳥画を得意としました。

高森碎巖 弘化4(1847)年～大正6(1917)年

上総国(現在の千葉県)出身です。儒学を服部蘭台に、書を萩原秋巖に、絵を渡辺華山の高弟である山本栞谷に習いました。明治維新後、司法省学校で法律を学び、熊本裁判所に赴任します。職を辞した後、絵画活動を続けるも、公的な展覧会には出品しませんでした。

野口幽谷 文政10(1827)年～明治31(1898)年

大工の棟梁源四郎の次男として江戸に生まれました。嘉永3(1850)年、椿椿山に師事し、花鳥画を学びました。明治5(1872)年のウィーン万国博覧会や明治10(1877)年の第1回内国勸業博覧会に出品し、画技を認められました。明治23(1890)年、橋本雅邦らとともに帝室技芸員に任命されました。弟子に椿山の孫である椿二山や松林桂月などがいます。

松林桂月 明治9(1876)年～昭和38(1963)年

山口県萩市に生まれました。明治26(1893)年に上京し、翌年、椿椿山を師とする野口幽谷の弟子になります。日本美術協会展や文展に出品し続け、南画界の重鎮と言われます。昭和19(1944)年、優秀な美術家へ与えられる帝室技芸員に任命され、昭和33(1958)年には文化勲章を受けました。